

# 第 32 回 学習院大学史学会大会

プログラム  
大会講演要旨  
研究報告要旨

期日：2016年6月4日（土）

会場：学習院創立百周年記念会館

主 催：学習院大学史学会

講演共催：学習院大学文学会

## 目次

プログラム	2
講演者紹介	3
研究報告者紹介	7
大会講演要旨	9
研究報告要旨	11

## プログラム

総会（9：30～10：45）3階 小講堂

開会挨拶

2015年度事業報告

2015年度決算報告

2015年度会計監査報告

2016年度委員長選出

2016年度委員委嘱

2016年度事業方針案

2016年度予算案

閉会挨拶

研究報告（11：00～12：00 13：00～15：10）

### 【第1会場(第1会議室)】

上條 静香	徳川吉宗による「アーカイブズ政策」と紅葉山文庫
西山 直志	内閣情報機構の創設と運用 —内閣官僚・横溝光暉の主導體制—
邊見 統	前漢時代における周辺民族の列侯封建と漢朝政治

### 【第2会場(第3会議室)】

長谷川 隆一	後漢時代の国家と民衆 —「恩信」を媒介として—
加賀 沙亜羅	結節点としての中世都市ヴォルムス
清原 和之	越境し、連鎖する記憶の制御は可能か —南アフリカの身体返還運動をめぐるアーカイブズ史的考察から—

講演（15：30～16：30 16：45～17：45）3階 小講堂

(学習院大学文学会共催)

福井 憲彦 氏	近代の遺産と歴史学の未来
三谷 博 氏	比較の中の明治維新 —その普遍性と特殊性—

懇親会（18：00～20：00）3階 第1～第3会議室

\* 学内会員：500円

\* 学外会員：1,000円

\* 一般：1,500円

## 講演者紹介

### 福井 憲彦

#### 〔経歴〕

1946年生まれ。1970年、東京大学文学部卒業。1974年、パリ第1大学留学（～1976年）。1977年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退・東京大学文学部助手。1983年、東京経済大学経済学部助教授。1988年、学習院大学文学部史学科助教授。1991年、同教授。2007年、学習院大学学長（～2014年）。2014年、学習院大学文学部史学科教授に復帰。

#### 〔単著〕

- ・『「新しい歴史学」とは何か——アナール派から学ぶもの』日本エディタースクール出版部、1987年（講談社学術文庫版、1995年）。
- ・『鏡としての歴史——現代へのメッセージを読む』日本エディタースクール出版部、1990年。
- ・『時間と習俗の社会史』新曜社、1986年（ちくま学術文庫版、1996年）。
- ・『歴史学の現在』放送大学教育振興会、1997年（改訂新版、2001年）。
- ・『世紀末とベル・エポックの文化』山川出版社、1999年。
- ・『近代ヨーロッパ史——18・19世紀の世界のなかで』放送大学教育振興会、2005年。
- ・『ヨーロッパ近代の社会史——工業化と国民形成』岩波書店、2005年。
- ・『歴史学入門』岩波書店、2006年。
- ・『興亡の世界史 13 近代ヨーロッパの覇権』講談社、2008年。
- ・『近代ヨーロッパ史——世界を変えた19世紀』ちくま学術文庫、2010年。

#### 〔共著〕

- ・『都市化する力』三交社、1992年。
- ・『世界の歴史 21 アメリカとフランスの革命』中央公論社、1998年（中公文庫版、2008年）。
- ・『地中海都市周遊 カラー版』中公新書、2000年。
- ・『パリ——建築と都市』山川出版社、2003年。

#### 〔編著〕

- ・『歴史のメトロロジー』新評論、1984年。
- ・『革命期・19世紀 パリ市街地図集成』柏書房、1995年。
- ・『歴史の楽しみ・歴史家への道——フランス最前線の歴史家たちとの対話』新曜社、1995年。
- ・『岩波講座世界歴史 18 工業化と国民形成』岩波書店、1998年。

・『世界各国史 12 フランス史』山川出版社、2001年。

〔共編著〕

・『アナール論文選』1-4, 新評論、1982-1985年。

・『ヨーロッパ近代史再考』ミネルヴァ書房、1983年。

・『ミシェル・フーコー 1926-1984——権力・知・歴史』新評論、1984年。

・『歴史の重さ——ヨーロッパの政治文化を考える』日本エディタースクール出版部、1991年。

・『世界歴史大系 フランス史』1-3、山川出版社、1995-1996年。

・『地域の世界史 6 ときの地域史』山川出版社、1999年。

・『都市の破壊と再生——場の遺伝子を解読する』相模書房、2000年。

・『歴史遊学』山川出版社、2001年（学習院大学文学部史学科編、増補版、2011年）

・『結社の世界史 3 アソシアシオンで読み解くフランス史』山川出版社、2006年。

・『興亡の世界史 20 人類はどこへ行くのか』講談社、2009年。

〔翻訳〕

・E・ル＝ロワ＝ラデュリ『新しい歴史——歴史人類学への道』新評論、1980年（新版、2002年）。

・ピエール・ディヨン『監獄の時代——近代フランスにおける犯罪の歴史と懲治監獄体制の起源に関する試論』新評論、1982年。

・フランソワーズ・ルークス『「母と子」の民俗史』新評論、1983年。

・フェルナン・ブローデル『ブローデル歴史を語る——地中海・資本主義・フランス』新曜社、1987年。

・ジョルジュ・デュビーほか『愛とセクシュアリテの歴史』新曜社、1988年（増補版、1993年）。

・ミシェル・ペロー『フランス現代史のなかの女たち』日本エディタースクール出版部、1989年。

・フィリップ・アリエス『図説 死の文化史——ひとは死をどのように生きたか』日本エディタースクール出版部、1990年。

・ロジェ・シャルチエ『読書の文化史——テキスト・書物・読解』新曜社、1992年。

・ウィリアム・ドイル『アンシャン・レジーム』岩波書店、2004年。

・アンドリュー・ポーター『帝国主義』岩波書店、2006年。

・オリヴァー・ジマー『ナショナリズム 1890-1940』岩波書店、2009年。

・ケヴィン・パスモア『ファシズムとは何か』岩波書店、2016年。

## 三谷 博

### 〔経歴〕

1950 年生まれ。1972 年、東京大学文学部卒業。1978 年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学・東京大学文学部助手。1979 年、学習院女子短期大学専任講師。1982 年同大学助教授。1988 年、東京大学教養学部助教授。1995 年、同大学教授。1996 年、東京大学大学院総合文化研究科教授。1997 年、文学博士（東京大学）。2015 年、定年退職・名誉教授・跡見学園女子大学教授。

### 〔単著〕

- ・『明治維新とナショナリズム 幕末の外交と政治変動』山川出版社、1997 年。
- ・『日本歴史叢書 ペリー来航』吉川弘文館、2003 年。
- ・『明治維新を考える』有志舎、2006 年（岩波現代文庫版、2012 年）。
- ・『NHK さかのぼり日本史 5 危機が生んだ挙国一致』NHK 出版、2011 年。
- ・『愛国・革命・民主 日本史から世界を考える』筑摩書房、2013 年。

### 〔共著〕

- ・『19 世紀日本の歴史 明治維新を考える』放送大学教育振興会、2000 年。

### 〔編著〕

- ・『近代日本の政治構造』吉川弘文館、1993 年。
- ・『東アジアの公論形成』東京大学出版会、2004 年。
- ・『リーディングス日本の教育と社会 6 歴史教科書問題』日本図書センター、2007 年。
- ・『高校生の為の東大授業ライブ』東京大学出版会、2007 年。
- ・ *Acta Asiatica 93: The Transformation of Japanese International Relations: From Early Modern to Modern Times*, The Toho Gakkai, 2007 年。

### 〔共編著〕

- ・『明治維新の革新と連続』山川出版社、1992 年。
- ・『地域史の可能性』山川出版社、1997 年。
- ・『日本立憲政治の形成と変質』吉川弘文館、2005 年。
- ・『国境を越える歴史認識——日中対話の試み』東京大学出版会、2006 年。
- ・『東アジア歴史対話——国境と世代を越えて』東京大学出版会、2007 年。
- ・『史料学入門』岩波書店、2007 年。
- ・『大人のための近現代史 19 世紀編』東京大学出版会、2009 年。

- ・『東アジア近代史<<特集 東アジアの国際秩序と条約体制>>』ゆまに書房、2010年。
- ・『講座明治維新1 世界史のなかの明治維新』有志社、2010年。
- ・『琉球から見た世界史』山川出版、2011年。

〔翻訳〕

- ・ *Escape from Impasse*, International House of Japan, 2006年（『ペリー来航』の英語版。新版、2008年）。
- ・『超越国境的歴史認識——来自日本学者及海外中国学者的视角』社会科学文献社（北京）、2006年（『国境を越える歴史認識』の中国語版）。
- ・『다시보는 동아시아 근대사』까치、2011年（『大人のための近現代史 19世紀編』の韓国語版）
- ・ *Toward a History beyond Borders*, Harvard University Asia Center, 2012年（『国境を越える歴史認識』の英語版）。
- ・『黒船来航——对長期的危機的予測摸索与美国使者的到来』社会科学文献社、2013年（『ペリー来航』の中国語版）。

## 研究報告者紹介

上條 静香（学習院大学大学院 人文科学研究科史学専攻 博士後期課程）

【研究テーマ】

日本近世史。かつては江戸城内に設けられた「図書館」と評価されたり、近年では江戸幕府の重要な文書・記録類を保管していたと評価されている、紅葉山文庫について研究している。特に徳川吉宗政権下における紅葉山文庫の充実・利用や、近世を通じた紅葉山文庫の性格の変化について考察している。今後は紅葉山文庫だけでなく、視点を江戸幕府のアーカイブズにまで広げて研究を進める予定である。

長谷川 隆一（早稲田大学大学院 文学研究科 東洋哲学コース 博士後期課程）

【研究テーマ】

中国古代における国家と民衆の関係性を、後漢時代に注目して研究している。特に国家という「権力」と民衆の二項対立を軸に、両者がどのような距離感を取っていたのか、そして互いにどのように関与しあっていたのかについて関心がある。それを、歴史的事象もしくは言説の世界から明らかにすることにより、現代的な問題としての国家と民衆の関係性を世に問うていきたい。

西山 直志（一橋大学大学院 社会学研究科 博士後期課程）

【研究テーマ】

昭和戦時期の国民動員運動について、次の様な問題関心で研究を行っている。国家全体を否応なく巻き込む総力戦は、日本の社会にどのような変容をもたらしたのか。政策主体（国家・政府）は総力戦の遂行へ向けた政策をどのように展開し、人びと（国民・大衆）はそうした事態へ如何に対応し、またそれぞれの運動の場に於てどのようなせめぎ合いが生じていたのか。

加賀 沙亜羅（首都大学東京大学院 人文科学研究科 博士後期課程）

【研究テーマ】

中世盛期～後期のドイツ、特にライン地域の都市に着目し、都市間のコミュニケーションや地域ネットワークといった概念を念頭に置いて研究を行っている。



## 邊見 統（学習院大学文学部 史学科 助教）

### 【研究テーマ】

専門は中国古代史。特に漢代の諸侯である列侯を中心に、漢代政治史研究を行っている。列侯は漢代二十等爵制の最上位である。漢初には有力な功臣が封建され、その後は外戚や丞相、周辺民族からの投降者も封建された。列侯が漢代の政治においていかなる役割を果たしたのかを明らかにすることを目的として研究を進めている。

## 清原 和之（学習院大学大学院 アーカイブズ学専攻 助教）

### 【研究テーマ】

イギリス近代史とアーカイブズ理論の二つの領域を研究している。イギリス近代史では、19世紀初頭に出現した女性預言者ジョアンナ・サウスコットに焦点をあてた民衆宗教運動をメディア論的に分析してきた。最近では、個人史的視点からの研究も進めている。一方、アーカイブズ学では、現代における情報管理の変容を捉えるレコード・コンティニューム理論を用いて、記憶の管理をめぐる諸問題とその可能性について考察している。

## 近代の遺産と歴史学の未来

福井 憲彦

掲げたテーマはじつに膨大なもので、満遍なく語ることは不可能である。それを承知で、個別の実証とは対極にあるこのようなテーマを掲げたのは、相互に関連しつつ位相の異なる二つのことが念頭にあり、私は相当な危機感を持っているからである。

第一は「近代の遺産」という点に関わる。現在進行形のグローバリゼーションに象徴されている世界の変化、地球全体の変化を、どう考えるか。それ自体は、たしかに歴史学の対象ではない。しかし歴史学もまた、現在における自らの立脚すべき位置を定める必要がある。現在の世界の状況、日本の状況を踏まえると、さまざまな面で相当に深刻な危機的あり方をしている、と言わざるを得ない。政治経済の多様な面で、あるいは社会文化のあり方でも、地球規模でのグローバルな相互連環が、多様な力学の働くなかで展開しつつある現在は、「文明史的転換点にある」と言えるかもしれない。しかしまたそのような現在は、19世紀から20世紀にかけて欧米（西洋）のヘゲモニーのもとに展開した「近代化」の結果という面を間違いなく持っている。その展開は、地球上の人間存在の豊かな可能性という点から考えると、ポジティブな面とネガティブな面、すなわち両義性を帯びて進行したものであって、どちらか一方のみを言挙げすることは認識を誤る。また、展開のヘゲモニーをとった西洋に、西洋中心主義の価値的優位を置くものではない。求められるのは脱中心的な思考であって、それがアジアにせよイスラームにせよ別の中心主義を対置することではない。個別の諸側面を全面的に論じることはできないので、「産業化と科学技術」や「国民国家」といった現在につながる最も核をなす問題について幾つか取り上げたい。これは歴史学における多元的な認識枠組みという点に関わる論点でもある。

第二は、「歴史学の未来」に関わる。近代学問の制度的確立は、そこにつながる歴史的前提があったことは当然であるが、基本的には19世紀以来の国民国家による統合性追求のなかで、国家ごとに構築された教育研究制度として進行していったことは周知であろう。「近代化」に知的基盤を与える近代学問の一つとして、そして国民にアイデンティティの基盤を与えるものとして重視されて形を成したのが、われわれの現在につながる歴史学であった。近代歴史学がナショナルヒストリーの特徴を強く身に帯びたのは、こうした歴史的脈絡においてである。じつに長いこと歴史学を拘束してきたこの枠組みが、国家領域内部についてはローカルヒストリー、その外部についてはグローバルヒストリーやトランスナショナルヒストリーによって、相対化されるようになってきたことはたしかである。しかし、研究の枠組みと対象の多様化と同時に、個別認識間の相互的な諸関係が全体的にどのような連環としてとらえるのか、考えるべきことは依然として少なくない。オリジナリティ追求という負荷のなかで、以前から指摘されてきたトリヴィアルなものへの埋没の危険は無視し難い。

現在の問題を見据えつつ、迂遠のようではあるが、歴史学の歴史を含めた歴史総体のとらえ返しが常に大切であろう。研究の成果として記述される歴史は、記述者＝歴史家が現在に軸足を置いて「過去／現在／未来」の三極を見据えながら、社会的な発信の意味を考えたものでありたい。私の話は、ほぼ40年来となる私自身の過去における発信を私自身で反省的に踏まえた、今一度の問題提起である。

## 比較の中の明治維新 —その普遍性と特殊性—

三谷 博

世界の知識界に対して日本史の研究はどれほど貢献できるのだろうか。日本の人文学は、西洋の学知の輸入を超えて、どれほどオリジナルな仕事ができるのだろうか。それを、明治維新という「よく知られている」はずの事件を取上げて、考えて見たい。

明治維新は人類が経験した近代諸革命の中で最大級のものであった。19世紀半ばの世界で中国・インドに次ぐ大人口を持つ社会で、世襲貴族の大部分を占めた武士がいなくなった。しかも、その政治的犠牲は約3万人で、フランス革命より三桁少なかった。驚くべき政治変革である。しかしながら、世界の学界でも、日本の学界でも、明治維新に対する関心ははなはだ乏しい。フランス、ロシア、中国で起きた革命には注目が集るが、明治維新は「その他大勢」に分類されて、無視され続けている。その主たる要因は「革命とは君主制の打倒である」という思い込みであるが、その他にも初期に明確な「反体制のイデオロギーや政治運動」がなかったこと、さらに維新後に成立した国家が20世紀前半に近隣を支配し、大戦争を引き起したという結果も手伝っている。明治維新は世界に確立した「近代革命」の「典型」から外れ、しかも侵略の源泉と見られるゆえに、無視されるのである。

しかし、21世紀のいま、人類の「革命」理解はより柔軟になっている。1990年前後の東欧や韓国・台湾の自由化、権威主義体制からの解放は、大規模な政治変革には多様な発端があること、かつ暴力が必須でないことを教えた。世襲貴族の解体が最小限の犠牲でいかに可能となったのか。その解明は今後の人類のために重要な課題であると言って良いだろう。

この講演では、明治維新の特徴であった、政治的犠牲の少なさ、および革命象徴としての「復古」の役割の二点に注目して、その背後にあった規定要因を探ってみたい。現象としては稀であり、特殊と見なされることであるが、そこから他の革命にも通底する普遍要因をつかみ出し、歴史的な現象をそれらの相互作用の結果として説明するとともに、他の革命にも新たな理解の光を投げようと試みる。

政治的犠牲の少なさを説明するために検討するのは、ナショナリズムの正負の役割、初期条件としての分権体制、迂回路への無意識進入、内乱の平準化作用などである。ここでは目的論的解釈を極力回避する。また、変革に使われた象徴としては、「復古」、「進歩」、「世直り」の三者を検討する。これらは現状否定の点で等価であるが、時間との関係では異なる。維新での三者の関係と移行の様子を調べれば、その時代的・空間的特徴が分るだろう。

この講演は維新それ自体の描写を目的とするものではなく、それを比較の中に置き、その然るべき所以を探求する。そのために、例えば「幕藩体制」といった現象の要約表現は避け、「双頭・連邦国家」といった分析用語を使って他の国家も比較可能とする。日本史研究を真に世界の学界に登場させるには、学界慣用の術語の鍛え直しが必要なことも訴えたい。

## 徳川吉宗による「アーカイブズ政策」と紅葉山文庫

上條 静香

1980年代、安藤正人氏により、文書が近世・近代の村落行政や家政運営の中でどのように作成され授受されたのかだけでなく、どのように保管され管理されたのかに着目すべきという「文書管理史」という観点が主張された。その後同氏は、個々の史料の理解や記録史料群の内部構造の解明のみならず、周辺に存在する他の記録史料や非記録史料との関係、あるいは当該史料が伝来するに至った状況や環境を歴史的・実態的に解明する必要があると指摘された。これを受け、1990年代には文書の保存と利用という観点から村方の文書に対する検討を加えた研究が多く出され、今日までにかなり蓄積されていると言える。近年ではその視点は幕府・藩にまで広がっているが、それでも幕府については立ち遅れていると言わざるを得ない。

江戸幕府の文書管理について、特に注目されているのが徳川吉宗によるものである。大石学氏・大友一雄氏らの研究により、享保8年(1723)8月の勘定所改編に伴って諸帳面が目録化されたことや、寺社奉行間で月番筆筒・年番筆筒を引き継ぐシステムと、月番筆筒への収納量が増大した際に当分必要のない記録を月番筆筒から年番筆筒へ移管するという2つのシステムが誕生し、その後引き継がれていったこと、そして『享保度法律類寄』、『撰要類集』、『公事方御定書』、『御触書寛保集成』などの法典編纂が行われたことなどが次々に明らかにされた。また、大石氏は「享保改革が、公文書以外にも、archivesに関する政策を展開していた」として、享保7年正月に幕府が逸書探索を行い、延享2年(1745)には諸家所蔵の記録・日記の目録を提出させることで紅葉山文庫の充実を図ったことを例に挙げているが、それ以上の具体的な記述はない。

一方、紅葉山文庫に関する研究は森潤三郎氏と福井保氏によるものが代表的であり、今日の基本文献になっている。しかしこれらは図書館史側からのアプローチであり、制度史的な叙述の仕方に留まっているのもまた事実である。近年では藤實久美子氏が、「紅葉山文庫には『記録史料』のように文書館で永久保存されるもの、および省庁が各部署で保管しているような現用・半現用の公文書や記録も収蔵されていた」ことを指摘されている。紅葉山文庫に納められていた記録史料については、大友一雄氏により「所領給付の書状の写し」の管理がシステム化されていたこと、高橋喜子氏により「御朱印写」(領地宛行状の写)が紅葉山文庫において他の蔵書と比べると極めて特殊な扱いを受けていたことなどが明らかにされた。

以上の研究動向を踏まえ、本報告では前提として紅葉山文庫の誕生の経緯を確認したうえで、紅葉山文庫がその内容・機能ともに充実した時期である吉宗期に焦点をあてる。まず先行研究で指摘されている吉宗がとった「アーカイブズ政策」について今一度確認する。次に吉宗政権下における紅葉山文庫を蔵書の蒐集、書物奉行の充実、文庫の利用の3面から考察する。そして最後に、吉宗がとった「アーカイブズ政策」と紅葉山文庫の充実との関係性を検討する。

## 後漢時代の国家と民衆 — 「恩信」を媒介として—

長谷川 隆一

戦後中国史研究において、後漢という時代は、あまり顧みられることのない時代であった。近年、陸続と出版されている後漢時代の専著は、まさにその問題にこたえようとするものである。しかし、それらの研究は、後漢時代の特質を明らかにすることに焦点が行き過ぎたことにより、特に後漢の中・後期に頻発していたはずの反乱という事象の分析を捨象してきた。本報告では、このような方法上の問題点に立脚し、研究視座として反乱の平定方法というものをを用いる。とくに、武力を用いない平和的な平定方法——「恩信」を媒介としたもの——を取り上げ、それにより、当該時代の国家と民衆の関係性について一つのあり方を述べることを目的とする。

はじめに、「恩信」の範囲について検討を行った。もとは資料用語である恩信を、より広い意味を含むものとしてとり、「漢人—夷人や官吏—賊、官吏—民衆という関係性の中で、両者を結び付ける」広い概念であると定義づけた。

続いて、官吏が「恩信」を用いた外在的な理由について考察を行った。それは一つに、郡国の兵を罷めたことによる軍事力の不足、二つに賊の根拠地が険阻な地にあったためであることを明らかにした。この「賊の根拠地」とは史料には「壘」や「營」と記されている。これらを一括して「村塢」と表記し、これに依った賊の成立させた固有な社会の存在を指摘し、「賊集団」と定義した。

最後に「賊集団」に対し、「恩信」を用いて平定する意味について述べた。史料を挙げながら、それは国家にとって異質な「賊集団」の存在を承認する、というものであり、それによって管理は円滑な統治を行っていたであろうことを指摘した。

以上、検討してきた事を踏まえた上で、「賊集団」に対する承認について展望を述べた。「賊集団」内における民同士の結合関係は、平常時に構成されたものではなく、反乱を起こした結果生じた場である「村塢」で行われていた。そして、派遣された官吏が、「賊的共同体」を承認したということは、反乱者として国家の枠からはみ出した異質なものたちに対する、後漢内秩序への回帰が行われた、ということになる。しかし、それはあくまで官吏(=後漢)が「賊集団」を承認した場合に過ぎない。つまり裏を返せば、「賊集団」を承認しなかった場合、彼らは反乱者でありつづけ、平定の対象として認識され続けることになる。翻って、「賊集団」を承認する、ということは、直接的な支配を貫徹するのではなく、支配の媒介物となる中間団体を承認する、ということになり、その場合における後漢内秩序への回帰は、その意味の上では直接的ではなくなる。ここに、反乱を起こすことでしか史料に名の残らない民衆たちと国家とのせめぎ合いを見ることができるのである。

## 内閣情報機構の創設と運用 —内閣官僚・横溝光暉の主導體制—

西山 直志

1936年7月、内閣へ設置された情報委員会は、その後1937年9月に内閣情報部、1940年12月に情報局へと改組されて、規模を拡張させていった。これら内閣情報機構は、社会領域の広がりや総力戦への対応に向けて行政国家化が進む中で、企画院等と並ぶ内閣補助部局として大きな位置を占めた。しかし、これまでの研究は史料状況や視角の制約もあって、十分な検討が成されて来たとは言えない状況にある。

内閣情報機構の淵源は、満州事変後の状況へ対応するため、1932年から外務省で開催された外務・陸軍・海軍の三者を中心とする連絡会議にあった。その後、内務・文部・逓信の各省関係官も加わるが、実態としては非公式な会合に過ぎなかった。1935年の中頃から、新たな国策通信社の設立問題と関わって正式な行政機構への移行が本格的に検討されたが、外務省と陸軍が対立する中で、結果的に官制による設置を主体的に推進したのは内閣官僚・横溝光暉であった。

この時、横溝は行政官庁としての内閣での事務方のトップたる内閣官房総務課長の職にあり、長年の内閣勤務の中で行政手法に知悉し、また各省間のセクショナリズムを問題視して総理大臣の権限強化を志向していた。ゆえに、その横溝が主導し、首相官邸に隣接する旧日本間に事務所が置かれた情報委員会は、各省間の「連絡調整」を任とする、総理大臣の幕僚機関とも言える性格を持つようになる。すなわち横溝主導體制における組織運用の中で、省庁を横断する「啓発宣伝」事務などを開拓していった。

その一年後、日中戦争が勃発すると、戦時への転換とそれに伴う業務の拡大のため、情報委員会は内閣情報部に改組され、横溝が部長に就任した。内閣情報部では、様々な任用方式を駆使して各省関係官や民間有識者などの豊かな人材を部務に参画させると共に、各省次官・情報関係主務部局長・文書課長の会議や新聞主要八社の各部長との懇談会など様々な協議の場を設定し、「連絡調整」機関としての機能も拡張させた。

また、横溝体制の運用方式が制度化された内閣情報部は、「啓発宣伝」の具体的実践として国民精神総動員（精動）運動を内務・文部両省と共管して主導するなど、国家総動員の要請に応える「思想戦」機関としての役割を担っていく。特に1939年度には内閣へ精動運動の企画部門が一元化され、そのもとで内閣情報部が運動を事実上専管して活発な活動を展開した。だが、他方でそうした動きは内務省との間に軋轢を生じさせた。その結果、精動運動が社会的な批判を受け議会でも問題化される中で、その弁明のために1940年2月、突如として横溝は内閣情報部長の地位を追われることになった。

その後、内閣情報部は情報局へ改組して、庁舎が首相官邸を離れるなど準単一省庁化されるが、それは各省庁の情報統制部門の寄り合い所帯であり、上述したような機能・性格はほとんど引き継がれなかった。つまるところ、横溝主導體制の内閣情報機構は、独自の歴史的意味を持つとすることができるのである。

## 結節点としての中世都市ヴォルムス

加賀 沙亜羅

ライン河沿いに位置する都市ヴォルムスは、中世において重層的な対外関係を有していた。まず、カロリング時代に王宮が置かれて以来、経済的特権を与えられるなど王権との密接な関連がある。また、司教都市としてヴォルムス司教の支配下で発展したうえ、マインツ大司教区に属していた。さらに、ライン宮中伯をはじめとする在地貴族の権力に対抗する為、近隣のマインツやシュパイアーと協力するに至った。本報告では、ヴォルムスの対外関係・外交政策に着目することで、中世における当該地域への理解を深めたいと思う。

本報告では、ヴォルムス周辺にあたるライン河上流域からライン河中流域を地域的対象に設定する。これは、およそバーゼルからボンを含んでいる。特にヴォルムス周辺は、カロリング朝からシュタウフェン朝に至るまで王権の基盤であった。この時期は、中世初期から中世中期のおよそ 500 年間に該当する。そのため、ヴォルムスの対外関係について考察することは、中世ドイツ王権ひいては中世世界そのものへのさらなる理解につながるのである。

かつて中世都市研究といえば、伝統的に法制史的観点からのアプローチが主であり、王権との関連を論ずることで帝国の構造図を描こうとする国制史研究が主流であった。現在では、1 つずつの都市を対象にした個別研究の蓄積を経て、王権とのつながりは別にした地域内における各都市・農村の線的・面的交流に焦点があたっている。本報告でも、地域史という観点に立ち、各所と築いた関係軸が集約される結節点としてのヴォルムスの独自性を明らかにしたい。

この地域は中世初期から王権力の基盤であったが、それゆえに権力闘争の場ともなった。1254 年にシュタウフェン朝が断絶したのちは、王と諸侯・諸侯同士・領主と都市・都市内の派閥といったあらゆる層で紛争が起こる。自らの利益を守る為に都市がとった手段は、近隣都市と同盟を結ぶことであった。ドイツで都市同盟が結成されはじめるのは 13 世紀初頭からだが、ヴォルムスは当初から指導的役割を果たした。しかし、1388 年にライン宮中伯との戦闘で大敗して以来、諸侯・領主に対し妥協的な態度をとるようになる。このような過程を経て、ヴォルムスは時代が近世に移行する以前に指導力を失っていった。

中世ドイツにおいては王権が弱く、特に中世後期からの諸侯による領邦政策によって中央集権からさらに遠ざかっていったことはよく知られている。ヴォルムスという具体例に着目することで、その様子がありありと浮かび上がってくるのである。

## 前漢時代における周辺民族の列侯封建と漢朝政治

邊見 統

漢代には二十等爵制が行われた。二十等爵制についてはこれまで文献史料・出土文字資料を用いて多くの研究が積み重ねられてきた。しかし、二十等爵制最上位の爵位である列侯に関する研究蓄積は厚いとは言えない。報告者は、これまでの漢代二十等爵制研究が民爵賜与などを通じて爵制全体の構造や意義の解明に力点を置いてきたことに一因がある、と考えている。

一方、報告者はこれまで主に政治史の視点から列侯に関する研究を進めてきた。前漢の建国期には大功臣を中心に 100 名を超える列侯が封建され、彼らは漢初の政治において重要な役割を果たした。これまでの漢初政治史では「高祖功臣」の括りが用いられ、彼らの盛衰と彼らに対抗する勢力の伸長が語られてきた。しかし報告者がこれまでに明らかにしたように列侯は、無官であっても長安にある限り、定期的に皇帝に謁見する権利を与えられており、一定の政治的影響力を保持していた。とすれば、無論、高祖功臣という枠組みも重要であるが、列侯に着目して漢初政治史を検討することは漢代の政治や国家構造を検討するうえで有益であると考えられる。そもそも漢初の列侯には高祖に従った大功臣が多く含まれており、彼らは高祖功臣の中心であったのである。

高祖末年には高祖と列侯の間で「白馬の盟」が結ばれ、皇帝といえども恣意的な列侯の封建は難しかった。一方で皇帝は種々の方策を用いて列侯を懐柔しつつ、権力を拡大したが、それは列侯封建にもあらわれている。たとえば「高祖系列侯位次」の制定と改定はそうした方策の 1 つであり、呂氏政権による呂氏集団の列侯への封建は権力拡大の一例と言える。

本報告ではそうした皇帝権力と列侯との関係を探る一例として、周辺民族からの投降者の列侯封建を検討したい。前漢時代には大規模な対外戦争の発生により、武帝期に周辺民族からの投降者が多く列侯に封建された。しかし景帝期以前にも武帝期に比べれば少ないが、周辺民族からの投降者が列侯に封建されている。そして彼らの封建は周辺民族との関係のみならず、漢朝内部の政治状況と関連して行われた。その最も顕著な例は景帝中 3 年（前 147）の匈奴降者の封建である。この封建は対外関係から見れば、匈奴からのさらなる投降を促す意味を有したが、漢朝内部の政治状況に着目すれば、景帝と高祖功臣列侯との対立における争点の 1 つとなった。この争いは景帝の勝利に終わり、その結果として丞相周亜夫が罷免され、高祖功臣列侯は衰退を加速させた。

以上のように、周辺民族からの投降者の列侯封建もまた政治史上の重要な事件である。本報告では上述の景帝中 3 年の封建を含め、周辺民族からの投降者の封建を漢朝内部の政治状況と関連づけて検討したい。それによって、前漢政治史研究の一助とすることができれば幸いである。



## 越境し、連鎖する記憶の制御は可能か

### —南アフリカの身体返還運動をめぐるアーカイブズ史的考察から—

清原 和之

20世紀末から現代にかけて、ヨーロッパ各地の博物館に納められたモノに対する非西欧世界からの返還要求が頻発しているが、なかでも「ホッテントットのヴィーナス」と呼ばれたコイコイ人女性サラ・バルトマン(1789-1817)をめぐる身体返還運動はイギリス、フランス、南アフリカの当事国間を越えてグローバルな反響をもたらした稀有な事例である。本報告では、この事例をアーカイブズ史的視点からとらえ直し、出来事の記録と記憶はいかに管理されうるのか、という問題について考察していく。

アパルトヘイト政策が実施された南アでは、1990年から1994年にかけての体制移行期に体系的な資料破棄が行われた。そして、紛争期のアイデンティティ・ポリティクスから新たなアイデンティティと集合記憶を再構築するために求められたのは、植民地主義・人種主義的バイアスのかかった公文書ではなく、アーカイブズ機関の外部におけるオーラルな記録や写真、景観、パフォーマンス、絵画、モノなどの遺物であった。しかしながら、そうした多様な形態の遺物はしばしば脱コンテクスト化された状態で断片的に残されるものである。

アーカイブズ資料が証拠として信頼されうるのは、その資料を生み出した作成者や活動のコンテクストが保持されているためである。従来、こうした資料と行為者、活動のコンテクストは単一のものと理解されてきたが、近年では、資料が生成され、管理され、利用され、保管される動的なプロセスが認識され、絶えず蓄積される重層的なコンテクストを管理していくことが求められてきている。アーカイブズ史とは、レコードの作成、使用、管理の複雑なプロセスを跡づけ、その過程における様々な行為者や他のドキュメントとの結びつきを記述することであるが、こうした作業は南アにおけるような断片的な資料にコンテクストを付与していく際にも有効であろう。

報告で取り上げるサラ・バルトマンは見世物として1810年にロンドンに連れてこられ、一世を風靡した後、パリに渡り死去した。バルトマンの遺物のメタナラティブはここから始まる。彼女はその特異な身体に魅せられた高名な博物学者によって解剖され、頭蓋骨、性器等が遺され、それらは彼女を模した人体の鋳型とともに人類博物館で1974年まで展示され続けた。サラの遺物は後に、当時大統領であったネルソン・マンデラが仏政府に要求し、2002年に返還されることとなるが、そこに至るまでの過程では、人種的・民族的記憶、国民的記憶、グローバルな記憶が乱立し、錯綜する様相を呈した。ところが、サラの「身体」が出世の地に埋葬されると、南アの国民的記憶という一つの解釈のもとに収斂し、民族的記憶、地域的記憶は急速に忘却されていくこととなる。以上のような事例のアーカイブズ史的分析から、資料の生成から多元的な記憶の想起までに至るプロセスを制御することは可能か、また、記録の再コンテクスト化にはいかなる意味があり、それは誰によってなされるのかについて考察し、若干の可能性と展望を提示してみたい。